2017年度人間福祉学部報

■社会福祉学科

今年度、社会福祉学科では藤井博志教授（地域福祉論）、李善惠准教授（社会福祉の歴史と思想）を専任教員として迎え、新たなスタートを切りました。

最初に、実習教育の実績を以下の通り整理します。

- ソーシャルワーク実習：53名（児童：12名、母子：6名、社協：7名、公的：6名、医療：5名、障害：7名、高齢：10名）
- 福祉社会フィールドワーク：12名（子育て青少年拠点夢つながり未来館：1名、波瀬むらづくり協議会：2名、いけま福祉支援センター：2名、全国コミュニティライフサポートセンター：6名、子ども情報研究センター：1名）
- 精神保健福祉援助実習：5名
- ソーシャルワーク・インターンシップ：1名
- 医療ソーシャルワーク・インターンシップ：1名
- 学校ソーシャルワーク実習：2名
- 大阪府福祉職場体験事業：3名（子ども家庭センター、子どもライフサポートセンター、障がい者自立相談支援センターでの職場体験）
- 大阪府民生・児童委員インターンシップ：5名

次に各専任教員の活動を報告します（五十音順）。

池埜聡教授は、今年度、書籍『ケアマネジメントにおける援助関係の軌跡』（足立里江氏との共著：関西学院大学出版会）、『福祉職・介護職のためのマインドフルネス』（単著：中央法規出版）を出版しました。また、「マインドフルネス研究会@梅田」なるものを主宰。毎月、日米のマインドフルネス研究の先駆者とともにスカイプも駆使して研究会を開催しています。来年度、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）客員研究員となり、“トラウマ・インフォームド・ソーシャルワークの構築”に挑戦予定です。

石川久展教授は、昨年度、体調不良のため芽立った研究や社会貢献活動ができませんでしたが、2017年度は少しずつではありますが、様々な研究活動や教育活動を再開することができるようになってきました。研究活動では、これまでの数年の量的調査の研究結果をまとめ、何本かの論文執筆に取り組んでいるところです。教育においては、研究演習Ⅰにおいて、この夏、沖縄でゼミ合宿をし、そのときに、沖縄国際大学の学生たちと沖縄の米軍基地問題や離島問題についてディスカッションをする機会を設け、大きな刺激を受けました。来年度は、もう少し研究活動及び教育活動の幅をもう少し広げていく予定です。

今井小の実教授の研究演習Ⅰは、人間福祉学部始まって以来、初となる（学生による証言）学祭の出店を果たしました。研究演習Ⅱは人数が少ないこともあり、研究室で授業を行い、親密な関係を築きながら研究に励んでいます。世代を超えた集まりの場、大学院のゼミでは毎回、メンバーによる研究報告とそのあとの議論が深まりをみせて、豊かで刺激的な学びの場になっています。

大和三重教授は今年度、学部長として2年目を迎え、学部開設10周年に向け人間福祉学部の記念行事として講演会の開催を2回行いました。研究面では、7月にサンフランシスコで行われたIAGGで研究発表し、高齢者を対象としたドラムによるワークショップに参加、さらにオークランドのCCRCを見学し入居者の方々と話す貴重な機会を得ました。教育面では研究演習ⅠでNPO「ニッチ倶楽部」の協力により民生委員を37年間務めてこられた103歳の女性を招待し、学生たちと社会福祉を志す意義について世代を超えて語り合う取り組みを実施しました。

風間朋子准教授は、文化の秋にちなんで研究演習Ⅰの学生と関西学院大学博物館を見学し、近代中国女性の服飾文化について学んでいます。留学生を交えての意見交換は大変に興味深かったとのこと。研究演習Ⅱでは、卒業研究に向け、春学期は各人のテーマを全体での議論を通して練り上げ、夏休みから執筆に取りかかりました。テーマを途中で変更したり、文章が上手くまとまらなか

ったりと悩みながらも意欲的に取り組んでいる様子だったようです。

川島恵美准教授の研究演習Ⅰは 16 名で、基本的なコミュニケーションについて、グループプロセスについてワークを交えて学んでいます。研究演習Ⅱは 14 名で、昨年からボランティアとして若年性認知症カフェに参加しその体験を卒業研究としてまとめた学生もいます。研究としては、今年度から、学科生の経年での学びの変化と卒業後への影響を追うトランジション研究を開始しました。

小西加保留教授は、2016 年度に特別研究期間を取得し、その間、長年に亘る HIV/AIDS ソーシャルワークの実践と理論のまとめに注力しました。また、アドボカシーの研究の延長線上に、意思決定支援のプロセスの明確化に向けて法律家と共に研究する機会を得て、貴重な気づきにつながることができたとのこと。さらに MSW 教育においては臨床推論という新たな方法に挑み、今後の継続的な課題とされています。なお以上の成果はいずれも 2017 年度から 19 年度にかけて出版予定です。

佐藤洋教授は、以前からの研究である急性心筋梗塞患者さんの大規模予後調査を継続し、心不全入院予測因子としての NTproBNP の意義についての論文を今年度投稿しました。査読後には、心筋梗塞関連では 60 本目の英文原著論文になる予定です。10 月には、日本学術振興会から「科研費」審査委員表彰を受賞し、学長より表彰状を受取りました。「表彰されるのは何歳になってもとてもうれしい、また頑張る」と喜んでいました。

芝野松次郎教授は、関西学院での最終年度を迎え、教育と研究の傍ら、研究室を引き払うべく整理に追われています。教育に関しては、最終年度であるにもかかわらず、卒業研究指導の難しさを痛感した 1 年だったとのこと。研究については、芝野ゼミで課程博士を取得し、第一線で活躍している研究・教育者とともに本の出版に取り組まれたとのことで、2 月末の出版が待たれます。

陳礼美教授は、高齢者ボランティアの組織力について研究しています。介護保険制度の総合支援事業が開始した為、介護サービスの提供者として高齢者ボランティアの活躍が期待されています。高齢者ボランティアの組織力とはなにか、そしてボランティア確保と維持の関連要因は何か等についてこの 3 年間研究を進めています。教育では、アデルファイ大学とのセミナー、マクロ SW 演習の学生メンター制度等新しい取り組みにも挑んでいます。

橋川健祐助教は、今年度から大阪府社会福祉審議会行政の福祉化推進検討専門部会委員や、きょうと農福連携センター付アドバイザーに着任するなど、広域行政施策にかかわっています。そのため、年度当初から実践を後押しする政策、ガバナンスを進めるガバメントをキーワードに任意の研究会を組織し、研究を進めています。一方、これまでに引き続き、過疎地域再生研究では「住み続ける権利」という観点から研究の必要性を整理し、フィールド調査を続けています。

藤井博志教授は、福祉専門職の地域福祉人材養成プログラムの開発を手掛けています。分野を横断し地域住民と協働して暮らしに必要な社会資源を開発できるワーカー養成です。また、多職種連携の時代に、医療分野をはじめとした多領域の専門職と生活の場での連携を促進できる社会福祉専門職の養成という目的もあります。今年は兵庫県社会福祉研修所での地域福祉コース研修として 4 日間の試行実施し、テキスト化に取り組んでいます。

前橋信和教授は、子ども家庭福祉分野ですが、児童相談や社会的養護が中心になります。科目では、子ども家庭福祉論や子どもと家庭の諸問題の講義のほか、ソーシャルワーク実習、スクールソーシャルワーク実習等も担当しています。研究演習では、子どもの貧困や子ども虐待などを取り上げています。近年の子ども虐待の急増、児童福祉法の改正等もあり、行政関係での講師依頼や子ども家庭福祉関係の調査依頼などが増加しています。

松岡克尚教授は、多職種連携（IPW）と多職種連携教育（IPE）の動向を研究しています。2016 年 12 月、専門誌『人間福祉学研究』にレビュー論文を上梓しました。更にエンドオブライフケアにおける IPW と IPE の課題検討の作業中です。また障害学生への合理的配慮支援ではインペアメント文化を重視したアプローチを構想して、まず

は障害学生のインペアメント文化がどのようなものかについて他大学の協力も得ながら調査を進めています。ゼミでは障害者との交流企画を毎年実施し、2016年度はボッチャを精神障害者の方と楽しみました。

安田美予子教授の研究演習Ⅰでは、福祉と経済活動の接点をテーマにゼミ活動を行っています。特に秋学期に入ってからは、社会福祉法人が経営する就労継続支援b型事業所の利用者で働き手である障害者の賃金アップをめざし、その人達が作っているチョコレートや焼き菓子の販売促進のアイディアを考えるという課題に取り組んでいます。福祉就労の理念であるディーセント・ワークや障害者就労の社会への啓発も含んだ販売促進という難しい条件を含んだ活動ですが、ゼミ生一丸となって取り組んでいます。

李善惠准教授は、実践の根拠となる価値に基づいたソーシャルワークの専門性を高めるため、社会福祉と宗教（特に、キリスト教）との関係に取り組んでいます。この取り組みは、実践の原動力である愛や人間に対する考え方が、貧困や差別、社会からの孤立などの社会問題を見て見ぬふりができず改善しようとする行動等の社会福祉実践につながっています。今日まで社会環境の変化に社会福祉実践がどのように対応してきたのか、様々な分野での先駆者たちの思想や実践の原動力を探っています。昨年度、公益財団法人賀川事業団雲柱社より「第1回の出版助成」を受け、今年度に『賀川豊彦の社会福祉実践と思想が韓国に与えた影響は何か』（単著、ミネルヴァ書房）を出版しました。

（池埜　聡）

■社会起業学科

人間福祉学部社会起業学科の開設から節目の10 年目を迎えました。2017 年度は 77 名の 1 年生が新たに加わり、2 年生 70 名、3 年生 74 名、4 年生 91 名、総勢 312 名でスタートしました。教員では、澤田有希子准教授が我々の仲間に加わりました。澤田准教授は、ケアワーカーやソーシャルワーカーなど、主に高齢者福祉に従事する対人援助専門職を研究対象とされ、ジェンダーの視点から、高齢者福祉施設に従事するケアワーカーによる看取りケアについての職務意識に関する調査研究等に取り組まれています（参考：人間福祉学部 HP　https : //www.kwansei.ac.jp/s_hws/s_hws_010904.html）。澤田准教授の加入により、教育・研究に厚みと活気が増し、新たな気持ちで節目の年度を迎えることができました。本年度も、社会起業学科の特徴を反映する数々の取り組みを実施しましたので、その概要を以下に示します。

①社会起業学科新入生歓迎プログラム「これが社起や DAY !2017」

社会起業学科では、新入生歓迎プログラムとして、「これが社起や DAY！」を毎年 4 月に実施しています。これは、「社会起業に関する学びと学生間交流」、「学科への求心力の向上」を目的としており、「学び」の部分では、教員による授業紹介やゲストスピーカーの講演等を行い、「交流」の部分では、共に身体を動かしたり、食事をしたりして交流を深めています。今年度の概要は以下の通りです。

- 日　程：2017 年 4 月 8 日（土）
- 会　場：関西学院大学 G 号館および学生会館新館 1 F　OFF TIME
- 参加者：1 年生 72 名、学生スタッフ 15 名（2 年生）
- 内　容：礼拝、ゲストスピーカーによる講演、授業紹介、レクリエーション、懇親会
- ゲスト：場とコト LAB 代表：中脇　健児氏

②英語中期留学

社会起業学科では、国際的なソーシャル・サービス領域で働いたり、起業したりするために必要な語学の修得を目指し、英語中期留学を実施しています（カナダ・クイーンズ大学 School of English：12 週間の語学プログラム）。今年度は 2 年生 10 名が参加し、自らの学びにおいて、大きな自信、収穫を得ることができたと思います。

③社会起業インターンシップ

1）インターンシップ（国内）

今年度は 3 名の学生が国内インターンシップに取り組みました。国内の NPO 法人等、3 年生の夏季休暇中に 3 週間の日程で行いました。インターンシップ先は以下の通りです。

- ANA ウィングフェローズ・ヴイ王子
- NPO 法人山科醍醐こどものひろば

2）インターンシップ（海外）

今年度は 1 名の学生が海外インターンシップに取り組みました。「海外での社会貢献活動について学ぶこと」「海外での実践力を高めること」「異文化の環境のなかで働く能力を養うこと」「社会の問題と課題を把握し取り組む能力を高めること」を目標に、夏季休暇中に 6 週間のインターンシップを行いました。インターンシップ先は以下の通りです。なお、インターンシップ先としてイギリスを予定していた学生もおりましたが、テロの危険性に鑑み、国内に実習先を変更しました。

- バティス女性センター（フィリピン）
- イギリスから変更された実習先：「THE BIG ISSUE JAPAN」ならびに「はんしん自立の家」の 2 か所

④社会起業フィールドワーク

1）フィールドワーク（国内）

今年度は 58 名の学生が国内フィールドワークに取り組みました。“現場から学ぶ社会起業の課題と取り組み”として、街に出て、社会的課題に直面している当事者の方や問題解決に向けて取り組みを行っている社会起業家にお会いしました。その中で、問題解決に取り組む姿勢を学び、人と会い、質問しながらお話を聞き、それをまとめて整理し、他人に伝える技術を獲得することを目的に、団体を取材させていただき、その様子を示すスライドショーを作成しました。インターンシップ先は以下の通りです。

- NPO 法人　尾道空き屋再生プロジェクト
- NPO 法人　ホームドア
- スワンベーカリー（大東店）
- ワークメイト
- NPO 法人　暮らしづくりネットワーク北芝

2）フィールドワーク（海外）

今年度は 22 名の学生が海外フィールドワークに取り組みました。“現場で学ぶ国際協力”をテーマに、タイを訪れました。国内フィールドワークと同様、団体を取材させていただき、スライドショーを作成しました。インターンシップ先は以下の通りです。

- タイ（バンコク・チェンライ・アサンプション大学）

⑤実践教育報告会

人間福祉学部各学科の実践教育を報告する場として、実践教育報告会が 12 月 9 日（土）に開催されました（G 号館 201 号、202 号教室）。本学科からも、フィールドワーク、インターンシップ等の実践教育科目に取り組んだ学生が、ポスター発表形式で報告を行いました。3 学科合同開催であるため、他学科の学生との意見交換や情報共有も活発に行うことができ、自らの関心領域を広げることにつながったと思われます。

⑥オープンキャンパスでの社会起業学科イベント

8 月 5 日（土）～6 日（日）の日程で、関西学院大学上ケ原キャンパスのオープンキャンパスが開催されました。本学科からは、「学生による社会的企業の取り組み」と題し、国際協力支援の一環として、学生たちが取り組むフィリピン人女性製作のフェアトレード商品の販売、および国際 NGO が取り組むアフリカの子女支援活動のためのファンドレイジングのイベントのビデオ紹介を行いました。2 日間で 420 名を超える参加者があり、大盛況に終わりました。

⑦2 年生の秋の学年懇親会

社会起業学科では、毎年 2 年生を対象に、「研究演習Ⅰ」の選択に向けた懇親会を実施しています。教員とじかに話ができるいい機会であり、学生たちから好評を得ている取り組みです。本年度は、10 月 4 日（水）に「Spoon Café」で開催し、学生、教員合わせて 55 名ほどが有意義な時間を過ごしました。

（林　直也）

■人間科学科

人間科学科が開設されて 10 年目となりました。今年度は、109 名が新入生として加わり、2 年生 101 名、3 年生 93 名、4 年生 130 名の総勢 433 名でスタートしました。前年度の卒業生（6 期生）は 108 名で、卒業後の進路は、一般企業（金融・保険、製造、卸売など）、公務員、教員、医療・福祉など、多岐に渡っています。就職を希望する学生における就職決定者の割合、いわゆる就職率は人間福祉学部全体で 99.3% と、昨年度に引き続き高水準で推移しています。教員は 12 名で、今年度から新たに桜井智恵子教授と笹塲育子専任講師が加わりました。

人間科学科では、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）として「人間科学に関する専門的知識を身につけ、質の高い生活と社会の実現に貢献できる」ことを掲げており、具体的には死生学・スピリチュアリティを中心とした学問分野、身体運動科学・身体パフォーマンスを中心とした学問分野の両領域、すなわち「こころ」と「身体」の両面から人間を深く理解することを学生の学修成果の目標としています。この方針に基づき、カリキュラムが編成されており、「人間科学入門」「人間科学実習入門」「人間科学フィールドワーク入門」「人間科学フィールドワーク」といった人間科学科独自の科目も開講されています。今年度の授業の概要を以下に紹介します。

「人間科学入門」

1 年次春学期の必修科目であり、人間は、その誕生から死に至る様々な局面において、どのようなことを経験し、こころと身体がどのように変化していくのかという点について、学科の全教員がオムニバス形式で授業を担当しています。今年度は、各教員の専門分野に応じて、「誕生」「発育発達と運動」「教育と社会」「悩み」「素質」「指導者」「身体運動の魅力」「結婚」「自己実現」「死別」「老い」「死」という各回のテーマを設定し、授業が行われました。最終回には、2013 年卒の上山美津穂さん（藤井ゼミ）、2014 年卒の後藤明日香さん（溝畑ゼミ）をゲストスピーカーとしてお招きし、人間科学科で学んだことが現在の自分にどのように活かされているかについて話していただきました。

「人間科学実習入門」

2012 年度に新設された 1 年次秋学期の必修科目であり、学科教員によるオムニバス形式の授業に加え、合宿を例年行っています。今年度の合宿は、10 月 21 日（土）～22 日（日）の日程で、昨年度と同様、淡路島の国立淡路青少年交流の家で実施されました（写真）。1 日目は開講式・アイスブレイクの後、午後からは身体系プログラムとして、心拍計を装着し、決められた数ヵ所のポイントを辿り、往復約 7 km を歩くという「チャレンジハイク」が行われました。夕食後には、「地球滅亡の危機！！」というこころ系プログラムが行われました。学生たちは地球滅亡の危機に面した宇宙船 α 号の乗組員として、それぞれのグループで指定されたリストの中から、地球脱出時のメンバーの選択について議論を交わしました。2 日目は台風の接近に伴い、予定されていたプログラムをキャンセルし、朝食後すぐに帰途に着くこととなりましたが、無事に合宿を終えることが出来ました。2 日目のプログラムについては、後日、学内の教室にて実施しました。

「人間科学フィールドワーク入門」

現場での実習に向けての前段階として、必要な基礎知識を学ぶための科目と位置づけて、2 年次秋学期に開講しています。今年度は開講曜日・時限を、昨年度の春学期の火曜 3 限から、秋学期の月曜 3 限に変更しましたが、受講者数は昨年度とほぼ変わらず 71 名が履修となりました。この授業では、フィールドワークの心得や記録の書き方などを学んだうえで、希望する実習先でのフィールドワークプランを作成し、体験実習を行います。今年度は、「大阪 YMCA」「箕面こどもの森学園」「ヴォーリズ記念病院ホスピス希望館」「長野総合スポーツクラブ」「庄内わんぱくの杜」「農家民宿」「あおぞら色彩楽園」「あしや音楽療法」「レインボーハウス」「むつき庵」「グランダ門戸厄神」の計 11 箇所の実習先にご協力いただき、実習を実施しました。

「人間科学フィールドワーク」

人間科学科での学びの集大成ともいえる科目であり、実際のフィールドでの実習を通して、ここ

ろと身体の両面からの人間への深い理解と支援のあり方を体得するとともに、自己への洞察を深めることを目的としています。今年度は5名の学生が履修し、小学校や保育所、音楽療法の現場やホスピス、スポーツ指導の現場などで実習を行いました。各学生が自らのこれまでの学びやバックグラウンドを踏まえて実習計画書を作成し、担当の教員の指導のもと、座学では学ぶことの難しい貴重な学びを得ることができました。

授業以外では、8月5日（土）、6日（日）に開催された西宮上ケ原キャンパスでのオープンキャンパスにて、学科独自イベントとして、学科の学びに関するパネル展示に加え、「こころカフェ」を実施しました。「こころカフェ」は、虐待やいじめ、自死、ターミナルケア、生きがいなどのテーマを通して「生きること」、「こころ」について、本学の院生や学部生と、来場した高校生が自由に語り合うことのできる場として一昨年度から開催しています。今年度は、5日（土）、6日（土）の両日各2回の計4回行いました。こころカフェの参加人数（生徒数）は、2日間で72名でした。「パネル展示」「相談」「こころカフェ」全体での来場者は、261名（生徒122名、親67名）でした。昨年度は中学生や高校1、2年生も多く見られましたが、今年度は高校3年生の数が圧倒的に多かったようです。

学部・学科開設から10年の節目を迎え、定年退職に伴う人事が動くなか、学部・学科の今後のありようを考える時機でもあります。人間福祉学部では現在、新カリキュラムの策定に向けての検討が進められており、人間科学科においても継続的な話し合いを行っています。次の10年を見据えて、「こころ」と「身体」の両面から人間を理解するという学科の理念を大切にしつつ、人間科学科の特色を活かした教育・研究活動のさらなる充実や展開が求められています。魅力ある人間科学科の将来像を皆様とともに描いていきたいと思います。

（坂口幸弘）

■言語教育

・必修英語科目

人間福祉学部では、必修外国語科目として英語講読と英語表現を設けています。学生の習熟度と第 2 外国語の選択科目に対応するため、クラス数は 15 となっています。流暢さの向上と素早く的確に情報を読み取る能力を養うために英語講読ではすべてのクラスで多読を授業外の課題としています。副読本の拡充と管理の適正化をはかり、学年により図書館蔵置のものと学部資料室蔵置のものとを使い分けています。専門教育への橋渡しとなるべく、人間福祉学部の社会福祉・社会起業・人間科学 3 学科と英語科の教員が分担執筆したテキストを使用しています。現在はその 2 冊目（『English for Human Welfare Studies』2016 年 1 月、朝日出版）を使用しています。また 1 年次の英語表現でも、本学部の英語教育方針を反映したシラバスに沿う授業進行をはかるため、本学部英語教員が作成した教科書（『English Beams』2016 年 1 月、金星堂）を使用しています。

より英語力を高めたい学生には、必修英語科目に替えて受講できるプログラムや科目が別途用意されています。一定の要件を満たせば、1 年生春学期、または 1 年生秋学期から履修することができるようになっています。なおこれらのコースを受講する場合、後述の人間福祉学部が提供する英語コミュニケーションを第 2 言語として選択することはできません。外国人留学生には日本語 I を必修科目として開講しています。

・第 2 言語科目

選択必修の第 2 言語としては、人間福祉学部が用意する英語コミュニケーション、日本手話、および言語教育センターが用意するスペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、朝鮮語のうちの 1 言語を 1・2 年次 4 学期間履修することを義務付けています。原則として途中で言語を変更することは認めていません。なお外国人留学生用選択科目として基礎英語を用意しています。以下に　①英語コミュニケーション、②日本手話、③スペイン語についての概略を紹介します。

①　英語コミュニケーションの授業では英語による異文化間コミュニケーション能力育成と多文化共生意識の涵養をはかり、ゲストスピーカーを招いた授業や交換留学生との交流を取り入れた授業も行っています。ゲストスピーカーの選定にあたっては、英米出身であっても英語圏における文化がもつ多様性を伝えられる方を講師とするよう心掛けていますし、非英語圏出身者で国際共通語として英語を用いた活動をしている方に、その活動フィールドや内容などを語っていただいています。春学期には米国で日本語を学習しており、6 月中約 2 週間日本を訪れている高校生と引率の教員を招き、生活習慣などの違いを認識できるような作業を通じて交流をはかりました。（写真 1、2）

（写真 1）

（写真 2）

②　本学部の設置趣旨に沿い実施されている日本手話では、学年の約 1/3 にあたる約 100 名の学生が受講しています。

手話実技の練習には学生 1 人当たり一定の空間が必要となるため、1 クラス 15 名に限っています。週 2 コマのうち 1 コマをネイティブ・サイナーの講師による実技学習に充て、もう 1 コマを

「聴者」講師による「ろう文化概論」「日本手話概論」「文法」に充てています。

実技学習は、手話で手話を教えるダイレクトメソッドを採用し、また幼児の言語習得原理に基づくナチュラルアプローチを中心に進めています。実技学習（もしくは実技の授業）では音声は禁止され、音声日本語の干渉を受けない環境の下で手話習得を促進し、同時にろう者の基本的会話マナーを学んでいきます。「ろう文化概論」では、ろう者のゲストスピーカーを招いていますが、その様子を録画し、資料室で閲覧可能にしています。授業で学んだ日本手話を授業外でも活用できる機会として、ろう者を招いての交流会、有志による施設見学、日本手話でろう者を観光地ガイドする体験、なども実施しています。

2年次の秋には、グループによる日本手話やろう文化に関する「日本手話研究会」を開催し、音声日本語でプレゼンする際の手話通訳の利用方法を学ぶ機会を設けています。

③　スペイン語は言語教育研究センターが提供している科目であり、全学共通カリキュラムにより運営されています。スペイン語圏でも特に中南米は、貧困などの多くの社会問題を抱えている点、また近年急速に発展し、外国資本の流入が大きくなっている地域が増加している点など、人間福祉学部における学びを大いに活かせるフィールドであると言えます。また、日本国内にも中南米出身者が多く在住し、スペイン語や近縁のブラジル・ポルトガル語文化への理解が地域社会の福祉を考える上で必須となっています。そのためスペイン語科目を履修する本学部生には2年間の履修期間が終了するときには、自分自身や自分自身を取り巻く事柄を簡単なスペイン語で表現でき、辞書を使えば、本やインターネットなどで自分に必要な情報を得ることができるようになることを学習目標としています。授業は週2回開講されていて、1クラスは日本人教員が主に文法を教え、もう1クラスはネイティブ教員が会話や言語運用の授業を行っています。

人間福祉学部では、例年30名前後の学生がスペイン語を履修していますが、入学時の履修外国語選択の時に別の言語を第一希望として選択していたのに、その言語の選択がかなわず、第二希望にしていたスペイン語を履修することになった学生も若干います。そのため、最初はモチベーションが上がらず、なじみある英語とは異なるスペイン語の特性のためにやる気をなくす学生もいますが、1年目の秋に入ると、複雑な動詞の活用にも慣れてきて、「面白くなってきた」と熱心に勉強し始める学生も少なくありません。授業ではスペイン語で意思伝達や情報収集ができる学生の育成に重点を置いてはいますが、スペイン語圏の文化や社会、日本に暮らすスペイン語圏出身者に関する教材や資料なども使用し、異文化理解を深め、多文化と共生していくための下地を学生の中に作ることができるよう努めています。

（中野陽子）

■チャペル

日時	奨励者	主題等
4 月 7 日（金）	嶺重　淑（宗教主事）	チャペル・オリエンテーション①
10 日（月）	嶺重　淑（宗教主事）	チャペル・オリエンテーション②
12 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	「地の塩として」
14 日（金）	広瀬康夫（吉岡記念館職員）	讃美歌を歌おう①
17 日（月）	広瀬康夫（吉岡記念館職員）	讃美歌を歌おう②
19 日（水）	宗教総部献血実行委員会	春の献血週間を覚えて
21 日（金）	藤井美和（人間科学科教員）	「大切なもの」
24 日（月）	グリークラブ	音楽チャペル
26 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	イースターを覚えて
28 日（金）	聖歌隊	讃美歌を歌おう③
5 月 1 日（月）	混声合唱団エゴラド	音楽チャペル
3 日（水）	石川久展（社会福祉学科教員）	「障がいとともに生きる」
5 日（金）	バロックアンサンブル	音楽チャペル
8 日（月）	嶺重　淑（宗教主事）	「タラントを活かして」
9 日（火）	大学合同チャペル第１日	於）中央講堂
10 日（水）	大学合同チャペル第２日	於）中央講堂
12 日（金）	山　泰幸（人間科学科教員）	幼き日の想い出①
15 日（月）	松岡克尚（社会福祉学科教員）	幼き日の想い出②
17 日（水）	池埜　聡（社会福祉学科教員）	幼き日の想い出③
19 日（金）	川島惠美（社会福祉学科教員）	「“時”を考える」
22 日（月）	ゴスペルクワイア（POV）	音楽チャペル
24 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	「関西学院と校歌」
26 日（金）	井手　浩（人間科学科教員）	幼き日の想い出④
29 日（月）	小西砂千夫（社会起業学科教員）	「トランプは好き？」
31 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	幼き日の想い出⑤
6 月 2 日（金）	木原桂二（北山バプテスト教会牧師）	「人間の存在価値」
5 日（月）	田淵　結（院長）	「ペンテコステ」
7 日（水）	C. Rigsby（商学部宣教師）	「荒れ野における神の御言葉」
9 日（金）	風間　朋子（社会福祉学科教員）	幼き日の想い出⑥
12 日（月）	聖歌隊	音楽チャペル
14 日（水）	安田美予子（社会福祉学科教員）	幼き日の想い出⑦
16 日（金）	佐藤博信（人間科学科教員）	幼き日の想い出⑧
19 日（月）	宗教総部献血実行委員会	夏の献血週間を覚えて
21 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	「見えるものと見えないもの」
23 日（金）	甲斐知彦（人間科学科教員）	幼き日の想い出⑨
26 日（月）	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
28 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	「狭い門から入る」
30 日（金）	前橋信和（社会福祉学科教員）	幼き日の想い出⑩
7 月 3 日（月）	宗教総部	「ハンセン病を覚えて」
5 日（水）	山本　隆（社会起業学科教員）	幼き日の想い出⑪
7 日（金）	星島小穂（社会福祉学科 4 回生）	「幸せって何だろう～ドイツ国際平和村での活動を通して」（国際社会貢献活動プログラム）
10 日（月）	中野陽子（英語科教員）	幼き日の想い出⑫

日時	奨励者	主題等
12 日（水）	大和三重（学部長）	春学期最終チャペル
9 月 20 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	新学期を迎えて
22 日（金）	嶺重　淑（宗教主事）	「映像で見る関西学院の歴史」
25 日（月）	溝畑　潤（人間科学科教員）	幼き日の想い出⑬
27 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	創立記念日を覚えて
29 日（金）	林　直也（社会起業学科教員）	幼き日の想い出⑭
10 月 2 日（月）	宗教総部献血実行委員会	秋の献血週間を覚えて
4 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	「皆に仕える者とは」
6 日（金）	大宮有博（法学部宗教主事）	「二人のマルティン・ルター」
9 日（月）	大石健一（茨木春日丘教会牧師）	「信仰なき者の信仰」
11 日（水）	桜井智恵子（人間科学科教員）	「マルタとマリア」
12 日（木）	大学合同チャペル第 1 日	於：中央講堂
13 日（金）	大学合同チャペル第 2 日	於：中央講堂
16 日（月）	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
18 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	「運命への愛」
20 日（金）	New Directions	音楽チャペル
25 日（水）	河鰭一彦（人間科学科教員）	幼き日の想い出⑮
27 日（金）	聖歌隊	音楽チャペル
30 日（月）	嶺重　淑（宗教主事）	宗教改革記念日を覚えて
11 月 1 日（水）	小西砂千夫（社会起業学科教員）	「終わりを意識し始めると」
8 日（水）	バロックアンサンブル	音楽チャペル
10 日（金）	澤田　有希子（社会起業学科教員）	幼き日の想い出⑯
13 日（月）	小西加保留（社会福祉学科教員）	「HIV ソーシャルワークにおける 3 つの出会いから」
15 日（水）	井上　智（神学部助教）	「赤字はいいこと」
17 日（金）	嶺重　淑（宗教主事）	「時を知る」
20 日（月）	笹塲　育子（人間科学科教員）	幼き日の想い出⑰
22 日（水）	ゴスペルクワイア（POV）	音楽チャペル
24 日（金）	李　善恵（社会福祉学科教員）	「感謝」
27 日（月）	宮野　麻里（人間科学科卒業生）	「自由に生きる」
29 日（水）	米谷友里子（教務補佐）	クランツ作り＆ツリー飾り付け
12 月 1 日（金）	嶺重　淑（宗教主事）	アドベントを覚えて
4 日（月）	芝野松次郎（社会福祉学科教員）	「人間福祉学部での歩みを振り返って」
6 日（水）	嶺重　淑（宗教主事）	クリスマス賛美歌練習
8 日（金）	宗教総部献血実行委員会	冬の献血週間を覚えて
11 日（月）	大学合同アドベントチャペルに合流	於：中央講堂
13 日（水）	人間福祉クリスマス祝会・リハーサル	
15 日（金）	人間福祉学部生によるゴスペル演奏	音楽チャペル
18 日（月）	永田雄次郎（文学部教授）	「クリスマスの頃、読みたくなる本」
20 日（水）	筒井信行（四条畷教会牧師）	※人間福祉クリスマス礼拝「闇に輝く光」
22 日（金）	嶺重　淑（宗教主事）	「静かなクリスマス」
1 月 10 日（水）	震災を覚えるチャペルに合流	於：ランバス記念礼拝堂
12 日（金）	大和三重（学部長）	秋学期最終チャペル

※10 月 23 日（月）は台風のため中止

＊上記の通り、2017 年度は、春学期 43 回、秋学期 41 回、計 84 回（合同チャペルを含む）のチャペルアワーを実施した。出席者はほぼ例年並みで、特に各種音楽団体による音楽チャペルには毎回多数の出席者が見られた。奨励の多くは人間福祉学部の教員が担当し、今年度は「幼き日の想い出」という共通テーマを設定し、計 17 人の先生方にこの主題で奨励していただいた。来年度は今年度の反省を踏まえ、さらに充実したチャペルプログラムを提供できるよう努めていきたい。

※2017 年度クリスマスチャペル報告

学部のクリスマスチャペルは例年と同様、クリスマス礼拝とクリスマス祝会を分けて実施し、クリスマス祝会を 12 月 13 日（水）の夕刻（18 : 30 ～20 : 20）に昨年と同様、学生会館新館 OFF TIME で開催し、クリスマス礼拝は 12 月 20 日（水）の通常のチャペルアワーの時間帯（10 : 35 ～11 : 05）に実施した。クリスマス祝会では、最初に短く礼拝の時間をもち、ハンドベルクワイアの演奏を聴いた後に「祝会」の部に移り、学部学生・教職員が軽食をともにし、ゴスペルクワイア（POV）所属の人間福祉学部生や教員有志、吹奏楽部有志によるクリスマス曲等の演奏を聴き、大和学部長扮するサンタからのプレゼントに興じたりしながら、楽しいひとときを過ごすことができた。また、クリスマス礼拝は人間福祉学部チャペルで静かに守り、日本キリスト教団・四条畷教会牧師の筒井信行先生より「闇に輝く光」という題でクリスマスのメッセージを語って頂いた。

参加者はクリスマス祝会が約 100 名、クリスマス礼拝の出席者は約 60 名で、例年とほぼ同数であった。特に祝会については、開催時期や内容等、様々な課題もあるが、来年は今回の反省点を踏まえて、会場やプログラム内容等を今一度検討し、より親しみやすいものになるように工夫していきたい。

（嶺重　淑）

■外国人留学生懇談会

2017 年度「外国人留学生懇談会」を開催

外国人留学生（学部・大学院）と教職員による「外国人留学生懇談会」を 7 月 6 日（木）5 限終了後と 11 月 15 日（水）昼休みに開催しました。

昨年度に引き続き、本年度も食事を交えながら、外国人留学生が日本での留学生活をより充実したものとして送ることができるように、日頃感じていることや進路などをざっくばらんに教職員と話せる機会としました。

2 回あわせて 10 名の参加を得て、和やかな雰囲気の中、様々な話題で盛り上がり、学生・教職員の双方にとって有意義なひとときとなりました。

（山　泰幸）

■人間福祉学部優秀卒業研究賞「あじさい賞」

人間福祉学部では、故　浅野仁名誉教授の寄付により、優秀な卒業研究を執筆した学部学生の努力を称えるため、優秀卒業研究賞（通称「あじさい賞」）を設けています。

名前の由来は、あじさいを同氏が好まれたことによります。

最優秀賞・優秀賞には表彰状と副賞（図書カード 10,000 円）が贈られます。

2016 年度の受賞者は次のとおりです。

・最優秀賞

梅木　太志

ペットロスにおける悲嘆反応と支援のあり方　－ペットロスの実態とリーフレット作成－

・優秀賞

千原紗起子

父親側から考える小児がん患児･家族のケア

奥田　　明

障害者のきょうだいの青年期における思いと支援のあり方　－インタビューを通して、青年期のきょうだいたちの感じる『社会の壁』とその解消について考える－

佐竹　美砂

若者が『死ね』という言葉を使う要因　－大学生のアンケート調査から－

人間福祉学部優秀卒業研究賞規程

（目的）

第 1 条　学校法人関西学院は、浅野仁氏（本学名誉教授）よりの寄付金をもって、人間福祉学部優秀卒業研究賞を設定する。

2　この賞は、人間福祉学部学生の学習・研究意欲を高め、勉学の向上をはかることを目的とする。

（資格及び交付）

第 2 条　この賞は、毎年人間福祉学部において優秀な卒業論文等を執筆した学生に授与する。受賞者を毎年若干名とし、受賞者には賞状と副賞を授与する。

（所管及び運営）

第 3 条　人間福祉学部に優秀卒業研究賞（浅野賞）選考委員会を設け、受賞者の選考に当たる。

2　選考委員会の構成及び選考方法については別に定める。

（規程の改廃）

第 4 条　この規程の改廃は、選考委員会の議を経て、人間福祉学部教授会で決定し、理事会の承認を得るものとする。

附　則

この規程は、2011 年（平成 23 年）4 月 1 日から施行する。

〔2016 年度　人間福祉学部優秀卒業研究賞・最優秀賞　要旨〕

ペットロスにおける悲嘆反応と支援のあり方

ーペットロスの実態とリーフレット作成ー

梅　木　太　志

近年ペットブームに伴うペットの家族化や日本人の人間関係の変化により、ペットが亡くなった時に大きな悲嘆やそれに伴う心身の反応が生じる「ペットロス」が社会問題となっている。瀬戸（1999）によると、ペットロスへの認識が低いわが国においては、ペットロスを軽く見たり嘲笑したり、あるいはまったくの無理解な態度を示すことによって、当事者の鬱状態を悪化させてしまう傾向があるという。人間と動物の関わりがこれまでにも増して密接になってきている今日において、ペットロスによる悲嘆とそれに伴う心身の反応の及ぼす影響は大きい。しかしながら我が国におけるペットロスの認知度は未だ低く、ペットロスによる悲嘆反応とコーピングの関連に焦点を当てた論文は見受けられない。そこで本研究の目的は以下の通りとする。

①ペットロスにおける悲嘆反応とコーピングの関連について検討する。

②ペットロスの認知度の向上に繋がる策を検討する。

今回の研究は大学生に対するアンケート調査、獣医という医療現場から見たペットロスに関するインタビュー調査、動物病院に設置するペットロスリーフレットの作成という 3 部構成で進めた。

アンケート調査は関西の私立大学生を対象として行い、有効回答は 213 名で、有効回収率は 99 %であった。質問紙は、ペットロスに関する基本的な項目、ペットロス悲嘆反応尺度、ソーシャルサポート尺度、精神的回復力尺度、ペットロスコーピング尺度から構成された。

Nolen-Hoeksema & Larson（1999）は死別後の情動焦点型対処として 6 つの対処方略について検討し、「感情表出」「援助希求」「再評価」がうつ症状や心理的苦痛の軽減に関係するのに対し、「反すう」「回避」は重いうつ症状や心理的苦痛と関係し、「気晴らし」は無関係だと述べている。しかしながら、ペットロス悲嘆反応尺度とペットロスコーピング尺度において、「自分の気持ちを人に話すようにした」や「他の人にサポートを求めた」といった、感情表出、援助希求の要素を含んだ「信仰心因子」は、悲嘆度が高く、ペットロス克服が比較的難しい傾向にあると考えられる「振り返り因子」「思い込み因子」との関連が見られた。これは、実際にペットロスに悩む飼い主が感情表出、援助希求をしたものの、周囲の理解を得ることができず、さらなる傷を負うことやペットロス克服の難化に繋がったのではないかと考えられる。また、「気晴らし因子」「死別受容・克服因子」は悲嘆度が比較的低く、ペットロス克服の方向に向かいやすい傾向にあると考えられる「成長因子」との関連が見られた。ペットを亡くした時は、亡くしたペットやそれが想起されるものから離れ、全く関係のないことでの気晴らしをする方が、ペットロスにおいては有効なコーピングである可能性がある。

インタビュー調査は、飼い主側だけでなく医療側から見たペットロスの実態を探り、今後の理想的なペットロスケアのあり方や、課題について明らかにすることを目的とし、大阪市内の動物病院の獣医の方と院長先生 2 名に行った。質問項目は、①獣医から見た飼い主の様子、②獣医としてのアプローチ、③獣医個人の考え方、グリーフについて、④今後のペットロスの展望、という大きく 4 項目から構成された。

インタビューの結果、ペットを家族として捉えるか否かで、同じ獣医療従事者である 2 名の間にもペットの捉え方には大きな考え方の相違があることが明らかとなった。飼い主と周囲の人の間だけでなく、同じ獣医療従事者の間でもペットの捉え方に相違が見られたことからも、一般的なペッ

トの捉え方を統一することは難しいと考えられる。このペットの捉え方の相違により、ペットを家族のような存在と認識する飼い主と、動物として認識する周囲の人という両者の認識に隔たりが生じるため、ペットロスによる悲嘆とそれに伴う心身の反応が理解されにくい現状が生まれると予測される。また、ペットロスのケアの理想は、周囲が能動的に働きかけるものではなく、当事者がありのまま感情を表現できるような環境を整え、その感情を周囲の人が傾聴の姿勢を持って受け容れることであるとされた。

リーフレット作成は、動物病院への設置を想定し、ペットを失った時の対処や、周りの人がペットロスに悩んでいる時の関わり方を考える契機を作り、ペットロスの認知度を向上させることを目的として行った。作成にあたり、グリーフカウンセラー（臨床心理士）の米虫圭子氏にご協力頂いた。リーフレットは、①表紙、②ペットの存在について、③ペットを失った悲しみ、④悲しみにどう向き合うか、⑤小さなお子さんがいるご家族へ、⑥リーフレットの概要、の 6 つのセクションから構成された。リーフレットを通じ、ペットロスが自然な反応であり抑え込む必要のないものであるということを理解してもらうことで、一人で悩みを抱え込もうとしないようになることを期待したい。

本研究によって、ペットロスにおける悲嘆反応とコーピングの関係性が見出すことができ、それは死別悲嘆とコーピングの関係性とは異なることが明らかとなった。また、リーフレットは動物病院に設置するまでにとどまってしまい、医療現場や両者の実際の声や、リーフレット使用後の効果を測定できていない点が本研究の課題の 1 つであるが、今後ペットロスの認知度が向上し、理想的なペットロスケアへの環境作りに繋がる一助となることを期待したい。